新連載 日本ワイン 揺籃期の挑戦者 1

ワイン産業は芸術だ！

――国連ウェルビーイングとコラボ

叶 芳和

著書に新刊『日本ワイン産業紀行』他。

ワイン産業は新規参入ラッシュが起きている。国税庁統計によると、日本ワインのワイナリー数は、二〇一一年一五四場、一九年三三一場、二三年四六八場と急増している。停滞する日本社会で、なぜ、このようなことが起きているのか。

脱サラ組や研究者、医者が第二の人生にワイン造りを目指しているのであるが、彼らは「わくわく楽しく働ける仕事」としてワイン産業を選んでいる。

ブドウが微生物の働きによってワインに変わっていく。味、香り、色、醸造が終わってみないと何が出て来るか分からない。ブドウの種類、醸造の温度等によっても違う。まるで釜から出て来る焼き物と同じだ。**わくわくした気持ちで働くワイン造りは陶芸家と同じだ。**

脱サラ組等の新規参入が多いのは、ワイン造りはクリエイティブな仕事であって、面白いからだ。ワイン造りは楽しく、また若者が自己実現できる産業である。

国際連合が提唱するSDGs（持続可能な開発目標二〇一五～三〇）は二〇三〇年で終わるので、**次の目標として「ウェルビーイング」well-being を重視した新たな国際目標を作る動きが始まっている。**ウェルビーイングとは「満足状態」、健康や幸福を意味する。ワイン造りはウェルビーイングに通じる。

私は、全国のワイナリー調査のうえ、ワイン産業は「わくわく楽しく働ける産業」であり、未来の産業社会を先駆けていると主張してきたが、はからずも、**国連の次期開発目標とコラボしている訳だ。**

ブドウは「貧乏農業」の典型であった。欧米ではブドウは加工用（ワイン原料）であり、痩せ地で作り、安い価格で買いたたかれた。米国の作家スタインベック『怒りの葡萄』（一九三九年）に見るように、貧しい農民の象徴だった。それが、時代は変遷し、今度は世界が目指す新しい開発目標の産業になる訳だ。

経済開発を卒業した後の社会を目指す、世界の新しい目標になろうとしている。**「農業が選ばれる」職業になる訳だ。**前々からその風潮はあるが、ここにきて、well-being という理念が価値を高めてきて「ワイン産業」が脚光を浴びることになった。